

陳寅恪『唐代政治史述論稿』

「上篇 統治階級之氏族及其升降」訳注稿（4）

陳寅恪 著／森部 豊 訳

Chen Yinque, *Tangdai Zhengzhishi Shulungao*,
Chapter 1, Part 4

MORIBE Yutaka

This article discusses a Japanese translation of Chen Yinque's *Tangdai Zhengzhishi Shulungao*, published by Chongqing in 1943. This book has three parts: “Tongzhijiejizhishizu ji Qishengjiang,” “Zhengzhigeming ji dangpaifenyue,” and “Waizushengshuaizhilianhuanxing ji Waihuan yu neizheng zhi quanxi.” This article describes a translation of Chapter 1 and represents a continuation of previous work (*Bulletin of the Institute of Oriental and Occidental Studies*, Kansai University, No. 54, 2021, No. 55, 2022, No. 56, 2023).

キーワード：陳寅恪（Chen Yinque）、唐代政治史述論稿（*Tangdai Zhengzhishi Shulungao*）、河朔三鎮（Heshuosanzhen）

【凡例】

- 本訳注は、1947年に上海商務印書館から出版された陳寅恪『唐代政治史述論稿』（以下、1947年版）を底本とし、脚注において『唐代政治史略稿 手写本』（上海古籍出版社、1988年。以下、手写本）との異同を示した。訳文は1947年版に拠る。
- 1947年版において、陳寅恪は補文を（ ）で示し、補注を〔 〕で示しているが、本訳注では陳寅恪による補文、補注を（ ）で統一して示した。
- 本文中の訳者による補訳、補注は〔 〕で示し、また脚注で訳注をしめした。ただし、元号の西暦表記と地名の比定については（ ）で示した。
- 陳寅恪は手写本において、「（ ）は不要で小注に改める（括弧不要、改作小注）」などの指示をしているが、この点、本稿ではふれない。
- 引用史料中の用語や陳寅恪の使用した用語のうち、「夷狄」「胡」などは訳さず、「 」で原文のまま示した。これらを異民族、非漢族などと訳すと、原史料や陳寅恪が伝えるニュアンスが薄れると考え、これらの語句はあえて訳出しなかった。ただ、具体的エスニックグループを指すことが明らかな場合、ルビの形で訳を付した。
- 陳寅恪は史料引用の際、原文を省略しながら引用する場合があるが、それらは「(上略)」「(中略)」「(下略)」と明記する場合と、「略曰(云)」と記すだけで、省略箇所を示さない場合とある。前者は原文のまま示し、後者については、訳文において「……」で省略部分を示した。
- 前回の訳注稿と同じく、陳寅恪の使用する「漢化」「胡化」などは「 」で原文のままであることを示し、特に訳者が解釈する場合はルビにて示した。

【訳注稿】

上編 支配階級の氏族とその交代（その4）

河北における「胡族」

その血統が確実に「胡族」である者には、次のような事例がある。

『旧唐書』巻200上「安祿山伝」附孫孝哲（『新唐書』巻225上「逆臣伝」も同じ）に次のようにある。

孫孝哲は契丹族の出身である。

『新唐書』卷210「藩鎮魏博傳」史憲誠¹⁾(『旧唐書』卷181「史憲誠傳」も同じ)に次のようにある。

史憲誠、その先祖は奚族の出身である。〔唐朝に帰属して〕靈武(寧夏回族自治区吳忠市)に移りすみ、建康の人と称した。三代にわたって魏博の軍将となった。

『新唐書』卷211「藩鎮鎮冀傳」李宝臣(『旧唐書』卷142「李宝臣傳」も同じ)に次のようにある。

李宝臣は、……もとは范陽(北京)にいた唐に帰属してきた奚族の出身である。騎射に長じていた。范陽〔節度使〕の將軍であった張鎮高が養って仮子としたのでその姓を名のり、忠志を名とした。盧竜府の果毅都尉となった。

『新唐書』卷211「藩鎮鎮冀傳」王武俊(『旧唐書』卷142「王武俊傳」も同じ)に次のようにある。

王武俊は、……もとは契丹の怒皆部族の出身である。父の路俱は、開元年間(713~741)に饒楽府都督の李詩ら五千帳とともに冠と帯をつけること〔高い身分〕を世襲することを求め、〔唐に〕帰属して薊(北京市)に居住した。〔この時〕武俊はわずか十五歳だったが、騎射に長じ、張孝忠とともに名を馳せ、李宝臣の帳下に所属し、副将となった。

『新唐書』卷211「藩鎮鎮冀傳」王廷湊(『旧唐書』卷142²⁾「王廷湊傳」も同じ)に次のようにある。

王廷湊は、もとは回紇の阿布思族の出身である。安東都護府に隷属していた。曾祖父の五哥之が李宝臣の帳下となった。強くて決断力があり、戦いに長じていた。王武俊は彼を養子としたので、王姓を名のり、〔その子孫は〕代々副将となった。

1) 『新唐書』の藩鎮列伝の書名の記述は、おおむね1947年版は「『新唐書』卷xxx藩鎮○○□□□傳」とし、手写本は「『新唐書』卷xxx藩鎮○○傳□□□傳」(○○は藩鎮名、□□□は人名)とする。訳注稿においては、すべて「『新唐書』卷xxx「藩鎮○○傳」□□□」に統一し、逐一の注記はしない。

2) 1947年版は「舊唐書壹肆捌」とするが、手写本は「舊唐書壹肆貳」と訂正する。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」李懐仙（『旧唐書』卷143「李懐仙伝」も同じ）に次のようにある。

李懐仙は柳城（遼寧省朝陽市）の「胡」の出身である。代々契丹につかえ、營州（遼寧省朝陽市）を守備していた。騎射に長じ、智謀があり、すばやく機転がきいた。安祿山が反乱をおこすと、副将に任命された。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」李茂勳（『旧唐書』卷180「李可拳伝」も同じ）に次のようにある。

李茂勳は、もともとは回鶻の阿布思〔族〕の後裔である。張仲武〔が幽州盧竜節度使〕の時、〔その遊牧集団の〕有力者たちとともに帰順してきた。じっくりと考える^{たち}質で、馳射に長じていた。張仲武は李茂勳を高く評価し、兵を率いることを任せた。つねに境界の守備について功績をあげたので、〔李の〕姓と〔茂勳の〕名を賜った。

『新唐書』卷213「藩鎮淄青伝」李正己（『旧唐書』卷124「李正己伝」も同じ）に次のようにある。

李正己は高句麗の人である。營州〔に駐屯する軍〕の副将となり、侯希逸に従って青州（山東省青州市）に入った。希逸の母は、李正己の父の姉妹である。

『新唐書』卷144「侯希逸伝」（『旧唐書』卷124「侯希逸伝」も同じ）に次のようにある。

侯希逸は營州の人である。……天宝の末年に營州の副将となり、保定城を守備した。安祿山が反乱を起こすと、……〔安祿山は親将の〕徐帰道を〔平盧〕節度使としたので、希逸は兵を率いて安東都護の王玄志とともにこれを斬った。……〔玄宗は〕詔して玄志に平盧節度使を授けた。玄志が亡くなると、〔副将の李正己は王玄志の子を殺し、皆と〕共に希逸を推戴し、詔があつて節度使を授けられた。……賊と戦い、しばしば功績をあげた。しかし孤軍無援となり、また奚に侵略されたので、そこでその軍二万人を選抜し、海を渡り青州に入って拠点としたので、〔營州の〕平盧〔節度使の役所〕はついに陥落した。肅宗はそこで希逸を平盧・淄青節度使とした。これより淄青節度使は常に平盧の名を節度使の軍額とした。

先に引用した「李正己伝」によれば、侯希逸は少なくとも母系としては高句麗の出身である³⁾。〔安史の乱が起きた〕当初、安祿山の命令に従わなかったが、その種族はもとより「胡人」の血統が流れており、その部下の兵⁴⁾もまた「胡化」した集団であったことがわかる。このため、李正己が節度使の地位を奪ったのち、藩鎮淄青もまた河朔とおなじような気風となり⁵⁾、ついに唐の中央政府にとって、わざわざいとなった。その原因を突きつめると、じつに淄青節度使が⁶⁾もともと河朔の「胡化」集団から分かれ出た者であったからである。

『新唐書』巻148「張孝忠伝」（『旧唐書』巻141「張孝忠伝」も同じ）に次のようにある⁷⁾。

張孝忠は……もとは奚の種族である。〔その家は〕代々、乙失活部族の族長であった。父の諡は、開元年間に部族民をひきいて唐に帰順した。……孝忠の始めの名は阿勞といい、勇猛をもって名を馳せていた⁸⁾。燕（河北北部）と趙（河北中部）では、ともに張阿勞・王沒諾干を重んじ、二人は名声を等しくした。沒諾干は、王武俊のことである。……天宝年間の末、弓術に長じていることから宮中に仕えた。安祿山は上奏し、麾下の指揮官とした。……安祿山と史思明が洛陽一帯を攻め落とした時、常に賊軍の先鋒となった。史朝義が敗北すると、そこで自ら降伏した。

『新唐書』巻224上「叛臣伝上」李懷光（『旧唐書』巻121「李懷光伝」も同じ）に次のようにある。

李懷光は渤海の靺鞨族の出身である。もとの姓は茹という。父の常は、幽州にうつり住み、朔方軍の部将となり、戦績をあげて〔李〕姓を賜わり、名を嘉慶と改めた。〔李〕懷光は軍にあつて功績をつみ……都虞候となった。……〔朔方〕節度使の郭子儀は……懷光に規律の取締りを任せた。

3) 「侯希逸は少なくとも母系としては高句麗の出身である」：1947年版は「知侯希逸至少其母系出自高麗」、手写本は「寅恪案、知侯希逸至少其母系為高麗人也」とす。

4) 「その部下の兵」：1947年版は「其部下兵衆」。手写本は「兵衆」を削除する。

5) 「このため……河朔とおなじような気風となり」：1947年版は「是以自李正己襲奪其業後、淄青一鎮亦與河朔同風」、手写本は「故李正己襲奪其業、而淄青一鎮雖不在河朔、亦與之同風」とする。

6) 「その原因を突きつめると、じつに淄青節度使が」：1947年版は「推求其故、實由其統治者」、手写本は「蓋其人」と書き換える。

7) 手写本は『新唐書』「張孝忠伝」の引用をすべて削除している。

8) 1947年版は「以勇名」とするが、中華書局標点本は「以勇聞」に作る。

李懷光は朔方〔節度使〕の軍将であり、河北に居住していない別系統の〔胡人の〕範囲に属すが⁹⁾、李懷光の先祖がかつて幽州に住んでいたことから¹⁰⁾、またここに付け加えることとした。唐王朝の中興の元勳である李光弼にいたっては、『新唐書』巻136「李光弼伝」（『旧唐書』巻110「李光弼伝」もほぼ同じ）に、

李光弼は、營州の柳城の人である。父の楷洛は武則天の時代に入朝した。

とある。李光弼もまた東北出身の「胡族」であり、かつ¹¹⁾安祿山と同郷であるが、政治上には相反する立場にあった。

河北における「胡人」の疑いのある人々

以上の人々はみな、確かに「胡族」であることに疑いはない。〔これとは別に〕また、じつは漢人であり、あるいは漢族と自称するけれども「胡種」の疑いがあり、いまだ〔漢人か胡人か〕決定することができない者がいる¹²⁾。以下、〔関連史料を〕列記してみよう。その要点は、実際に〔その人が〕漢人であるとか、あるいは「胡族」の疑いがあるということにかかわらず¹³⁾、その人が先祖代々、あるいは本人が必ず河朔に居住し、それが長期にわたったため「胡化」し、それゆえまた「胡人」と異ならないということにある。

① 藩鎮魏博の事例

例えば¹⁴⁾、『新唐書』巻210「藩鎮魏博伝」田承嗣¹⁵⁾（『旧唐書』巻141「田承嗣伝」同じ）に次のようにある。

9) 「河北に居住していない別系統の範囲に属す」：1947年版は「屬於別一系統不在河朔範圍」、手写本は「屬別系統不在河朔範圍」とする。

10) 「李懷光の先祖がかつて幽州に住んでいたことから」：1947年版は「然以其先嘗居幽州」、手写本は「以」を削除する。

11) 1947年版の「且」は手写本では削除する。

12) 「以上の人々はみな、……いまだ決定することができない者がいる」：1947年版は「以上諸人皆確爲胡族無復疑義。又有實爲漢人、或雖號漢族、而帶胡種嫌疑、未能決定者」、手写本は「以上諸人或確爲胡族無疑者。又雖是漢族、而有胡種嫌疑、未能決定者」とする。

13) 「その要点は……かかわらず」：1947年版は「其要點在無論實爲漢人或胡族之嫌疑」。手写本は「其要點在無論爲漢人抑或有胡族之嫌疑」とする。

14) 手写本は、「例えば」の前で改行する。

15) 1947年版は「田承嗣」の語は無い。

田承嗣は平州盧龍（河北省秦皇島市盧竜県）の人であり、代々盧龍軍に仕え、俠気がある人物として知られ、安祿山の麾下として従っていた。

『旧唐書』卷141「田弘正伝」（『新唐書』卷148「田弘正伝」も同じ）に次のようにある。

田弘正の……祖父の〔田〕延暉は魏博節度使の〔田〕承嗣の叔父である¹⁶⁾。……弘正は……騎射に長じ、……〔魏博の〕衙内兵馬使となった。……〔田弘正は〕魏博節度使の地位を授けられると、次のように上表した。「……私の一族はもともと辺境に住んでおりますが、代々唐の人であります。……戦地をかけめぐっていたため、朝廷の儀礼をよく見る事ができませんでした。……つつしんで申し上げますに、天宝よりこのかた幽州で反乱がはじまり、河北の辺境の地は、ことごとく荒廢した戦場となってしまいました。……官爵は子孫が世襲し、刑罰や恩賞はみずから勝手に行っておりました。……」

『新唐書』卷210「藩鎮魏博伝」何進滔（『旧唐書』卷181「何進滔伝」も同じ）に次のようにある。

何進滔は靈武の人であり、代々靈州の軍の將校だった。青年の時、魏州（河北省大名県）に客居し、〔魏博節度使の〕軍に仕えた。

前に引用した『新唐書』〔卷221下〕「西域伝」によると、昭武九姓のなかに「何」姓がある。また、何進滔は靈武より魏州に移住している。このことから、彼の祖先は「羯胡」であると考えられる。また何進滔自身は魏に居住していたが、当時の魏〔博〕の地もまた「胡化」していた地域である。

『旧唐書』卷181「韓允忠伝」（『新唐書』卷201「藩鎮魏博伝」韓君雄も同じ）に次のようにある。

韓允忠は魏州の人である。父の国昌は、魏州の要職を歴任した。

16) 1947年版は「魏博節度使田承嗣之季父也」とするが、『旧唐書』本文には「田」字は省略されている。手写本は「田」字を削除する。

『旧唐書』卷181「楽彦禎伝」（『新唐書』卷210「藩鎮魏博伝」楽彦禎も同じ）に次のようにある。

楽彦禎は魏州の人である。父の少寂は、〔魏博節度使の管轄である〕澶・博・貝三州の刺史を歴任した。

『旧唐書』卷181「羅弘信伝」（『新唐書』卷210「藩鎮魏博伝」羅弘信も同じ）に次のようにある。

羅弘信は魏州貴郷の人である。曾祖父は秀、祖父は珍、父親は讓といい、みな魏州の軍校を務めた。

『北夢瑣言』卷5「中書蕃人事」によると、羅も「胡姓」である¹⁷⁾。そうならば¹⁸⁾ 羅弘信が代々「胡化」した地域に定住したのみならず、元々は「胡族」という可能性もある。

② 藩鎮幽州盧竜軍の事例

『新唐書』卷225中「逆臣伝中」朱泚（『旧唐書』卷200下「朱泚伝」も同じ）に次のようにある¹⁹⁾。

朱泚は幽州昌平の人である。父の懷珪は、安祿山・史思明の二人の賊に仕えた。

『旧唐書』卷143「朱滔伝」（『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」朱滔も同じ）に次のようにある。

朱滔は反乱を起こした朱泚の弟である。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」朱克融（『旧唐書』卷180「朱克融伝」も同じ）に次のようにある。

17) 『北夢瑣言』卷5「中書蕃人事」（中華書局、2002年、97頁）

……唐自大中至咸通、白中令入拜相、次畢相誠・曹相確・羅相劼、……蓋以畢・白・曹・羅為蕃姓也。

18) 「そうならば」：1947年版は「然則」。手写本は「則」とする。

19) 手写本は『新唐書』「逆臣伝中」朱泚の引用箇所をすべて削除している。

朱克融は朱滔の孫である。

『旧唐書』卷143「劉怦伝」(『新唐書』卷212「藩鎮盧竈伝」劉怦も同じ)に次のようにある。

劉怦は幽州昌平の人である。父の劉貢は、かつては広辺軍と大斗軍の長官²⁰⁾を務めた²¹⁾。劉怦は朱滔の姑〔父の姉妹〕の子である。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竈伝」李載義(『旧唐書』卷180「李載義伝」も同じ)に次のようにある。

李載義は恆山愍王〔の李承乾〕の後裔と自称していた。その性格は自信にあふれて勝手気ままで、好んで豪傑と交遊した。その力は強い弓をひき格闘技に秀でていた。劉濟は幽州にいた時、彼の能力を評価し、自分の直属の部下にした。

李載義が李承乾の後裔と名乗るのはもとより仮託であるが、たとえ李承乾の後裔ではあっても、彼も河北の漢人の将軍と同じように「胡化」した漢人であると私は考えている。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竈伝」楊志誠(『旧唐書』卷180「楊志誠伝」も同じ)に次のようにある²²⁾。

〔楊〕志誠は李載義に仕えて牙将となった。……載義が〔幽州から〕逃亡したので、みずから都知兵馬使²³⁾となった。……〔大和〕八(834)年、兵士たちのクーデタによってその地位を追われ、部将の史元忠が推戴され留後の職を統べた。

20) 中華書局標点本は、「広辺大斗軍使」とし、大斗軍を固有名詞と解し、広辺をその修飾語と解しているようである。大斗軍は河西節度使の指揮下にある軍鎮であり、涼州(甘肅省武威市)の西、200里に置かれていた(『旧唐書』卷38「地理志一」河西節度使条)。すると、劉貢は河西節度使麾下の将軍だったのだろうか。ところで、「広辺」は幽州・盧竈節度使麾下、嬀州に置かれていた軍鎮の一つという記録がある(『新唐書』卷39「地理志三」嬀州条)。とすると、この大斗軍は、史書の記載されない幽州盧竈節度使下に置かれた軍鎮の一つの可能性はないだろうか。

21) 1947年版は「父貢常為廣邊大斗軍使」とするが、中華書局本により「父貢嘗為廣邊大斗軍使」に改める。

22) 「次のようにある」：1947年版は「云」、手写本は「略云」とする。

23) 1947年版は「都兵馬使」に作る。中華書局標点本により「都知兵馬使」に改めた。

楊志誠と史元忠の氏族は史料に詳しく残されておらず²⁴⁾、確実に言える証拠はないが、彼らとともに「胡化」した者たちであることは疑いない。突厥の阿史那氏・阿史德氏はみな史氏と略称し²⁵⁾、中央アジアの昭武九姓の中に史氏があり²⁶⁾、史憲誠は、もとは奚族であるが、その姓もまた史である（先に引用した両唐書「史憲誠伝」に見える）ので、史元忠がもとより「胡族」出身である疑いは限りなくある。

『新唐書』巻212「藩鎮盧龍伝」張仲武（『旧唐書』巻180「張仲武伝」も同じ）に次のようにある。

張仲武は、范陽の人である。『左氏春秋』に通じていた。会昌年間のはじめ、雄武軍使となった。〔陳〕行泰が〔幽州節度使の史〕元忠を殺した。……そして仲武は自分の配下の呉仲舒を派遣して入朝させ、幽州節度使の軍をもってウイグルを攻撃せんことを願ひ出た。〔李〕徳裕はそこで北方の事情を尋ねると、仲舒はこのように言った。「陳行泰と〔張〕絳はともに外來の者であり、人心がつかみませんでした。張仲武は、旧将である張光朝の子であり、年は五十余歳、書物に通じ、軍事に習熟しており、その性格は忠義で、朝廷に帰順し好を通じることを願っております」と。……李徳祐は宮中に入って²⁷⁾ 皇帝に建白した。……そこで〔張仲武を〕兵馬留後に抜擢し、……張絳は果たして〔幽州の〕軍に放逐されることとなった。……

陳行泰と張絳の経歴は詳しくはわからないので、これ以上、論じることはできない²⁸⁾。張仲武の漢化の影響は比較的深く、河北においては例外といえる²⁹⁾。しかし、軍兵士の心をつかんでいた理由をたどってみると、〔張仲武は〕范陽の土着している者で³⁰⁾、かつその家系は幽州節度使麾下の旧将であったことにある。陳行泰と張絳はともに外來の者だったため、張仲武と〔節度

24) 「楊志誠と史元忠の氏族は史料に詳しく残されておらず」：1947年版は「楊志誠史元忠之氏族史傳不詳」、手写本は「楊志誠史元忠之氏族史不詳記」とする。

25) 「突厥の阿史那氏・阿史德氏はみな史氏と略称し」：1947年版は「突厥阿史那氏阿史德氏皆湮作史氏」、手写本は「突厥阿史那氏又湮作史氏」とする。

26) 「中央アジアの昭武九姓の中に史氏があり」1947年版は「中亜昭武九姓中有史氏」、手写本は「中亜昭武九姓中復有史氏」として「復」を補う。

27) 「入って」：1947年版、手写本ともに「乃」に作る。中華書局標点本により「入」に改めた。

28) 「陳行泰と張絳の経歴は詳しくはわからないので、これ以上、論じることはできない」：手写本は、この一文を削除する。

29) 「河北においては例外といえる」：1947年版は「在河朔頗爲例外」、手写本は「在河朔」を削除する。

30) 「范陽の土着している者で」：1947年版は「以本爲范陽土著」、手写本は「爲」を削除する。

使の地位を] 争うことはできなかったのだ。しかしながら李徳裕の策略でなければ、張仲武もまたただちに幽州の鎮将になることができたとは限らなかった。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」張允伸（『旧唐書』卷180「張公素伝」も同じ）に次のようにある。

張允伸は范陽の人で、代々〔盧竜軍の〕軍校であった。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」張公素（『旧唐書』卷180「張公素伝」も同じ）に次のようにある。

〔張〕公素は范陽の人で、節度使麾下の部将として張允伸に仕えた³¹⁾。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」李全忠（『旧唐書』卷180「李全忠伝」も同じ）に次のようにある³²⁾。

李全忠は范陽の人である。〔盧竜節度使に〕仕えて棣州（山東省濱州市陽信県）の司馬となった。……辞めて帰り、李可挙に仕えて牙将となった。李可挙が亡くなると、〔盧竜軍の〕兵士たちは〔李全忠を〕推して留後とした。

『新唐書』卷212「藩鎮盧竜伝」劉仁恭に次のようにある。

劉仁恭は深州（河北省深州市西南旧州）の人である。父の晟は范陽に身を寄せ、李可挙の新興鎮将³³⁾となったので、劉仁恭は〔盧竜〕軍に仕えた³⁴⁾。

『旧唐書』卷180の朱克融等の「伝」の末尾に、おおよそ次のようにある。

31) 「節度使麾下の部将として張允伸に仕えた」：1947年版は「以列校事（張）允伸」に作り、手写本は「以列將軍允伸」と修正するが、中華書局標点本により「以列將事允伸」に改め翻訳した。

32) 「次のようにある」：1947年版は「云」、手写本は「略云」とする。

33) この新興鎮は幽州・盧竜節度使管内の軍鎮名だと推測できるが、他に該当する史料が無く不詳。

34) 「劉仁恭は〔盧竜〕軍に仕えた」：1947年版は「故事仁恭軍中」と引用するが、中華書局標点本により「故仁恭事軍中」と改めた。手写本は訂正されている。

史臣曰く、……かの幽州は……その住民は強くて勇ましく……近年では安祿山や史思明に感化された。二百年余り、みずから互いに〔節度使を〕重ねて擁立し、朝廷が時に節度使を任命しても、幽州の人々はその節度使を放逐することに力を尽くしたのだった。困窮に慣れ過ちを忘れると、尾が大きすぎると思うように振り動かせなくなるように、兵士の力が強すぎて節度使の制御がきかなくなるが、一朝一夕にそうなったというわけではないのである。

③ 横海節度使・程日華、李全略の事例

『新唐書』巻213「藩鎮横海伝」程日華（『旧唐書』巻143「程日華伝」も同じ）に次のようにある。

程日華は、定州安喜県（河北省定州市）の人である。……父の元皓は安祿山の部下となり、〔安祿山から〕偽の定州刺史の職を与えられた。そのため、日華は〔定州の〕軍に籍をおき、張孝忠の牙将となった。

『新唐書』巻213「藩鎮横海伝」李全略（『旧唐書』巻143「李全略伝」も同じ）に次のようにある。

李全略は〔鎮州の王武俊に〕仕えて、〔その麾下の〕指揮官となった。

『新唐書』巻214「藩鎮彰義伝」呉少誠（『旧唐書』巻145「呉少誠伝」も同じ）に次のようにある。

呉少誠³⁵⁾は幽州潞県（河北省三河市）の人である（父は魏博節度都虞候だった³⁶⁾）。

④ 彰義節度使・呉少陽、呉少誠の事例

『新唐書』巻214「藩鎮彰義伝」呉少陽伝（『旧唐書』巻145「呉少誠伝」も同じ）に次のようにある。

35) 1947年版は「呉少陽」とするが、中華書局標点本により「呉少誠」に改めた。手写本は修正している。

36) 父の職位の情報は『旧唐書』巻145「呉少誠伝」に見える。

呉少陽という者は……呉少誠とともに魏博軍に在籍し、朋友の間柄だった。呉少誠が淮西を手に入れると、金帛を多く出して呉少陽を迎え、養って弟とし、要職に任命した。隙間もないほど親密であった。

⑤ 沢潞節度使・劉悟の事例

『新唐書』巻214「藩鎮沢潞伝」劉悟（『旧唐書』巻161「劉悟伝」も同じ）に次のようにある。

劉悟、その祖父は正臣といい、平盧軍節度使であった。〔安祿山が反乱をおこした時、その本拠地の〕范陽を襲撃したが勝利せず、亡くなった。

『旧唐書』巻145「劉全諒伝」（『新唐書』巻151「董晋伝」附陸長源伝も同じ）³⁷⁾に、

〔劉全諒の〕父の客奴は、〔かつて〕討伐軍に従軍したことによって幽州の昌平県（北京市昌平県）に住むこととなった。若くして武芸に秀で、平盧軍に従軍した。……〔天宝〕十五載（756年）四月、客奴に〔柳城郡太守・撰御史大夫・平盧節度支度營田陸運・押兩蕃渤海黒水四府・経略及び〕平盧軍使を授け、よって名を正臣と賜った。……〔劉正臣がそこで兵を率いて平盧から来て〕范陽を攻撃したが、……逆賊の將軍・史思明らによって大いに撃ち破られた。劉正臣は逃げ帰ったが、王玄志に毒を盛られ亡くなった。

とあることによれば、劉氏もまた幽州昌平に住んでおり、しだいに「胡化」したものであることがわかる。

⑥ その他の事例

『旧唐書』巻122「張献誠伝」（『新唐書』巻133「張守珪伝」附献誠條も同じ）に次のようにある。

張献誠は陝州平陸（山西省運城市）の人である。〔幽州節度使・〕幽州大都督府長史の〔張〕守珪の息子である。天宝の末、逆賊の安祿山に帰服し、偽の官職を与えられた。さらに史思明に帰順し、史思明のために汴州に守り、反乱軍数万人を率いた。

37) 「（『新唐書』巻151「董晋伝」附陸長源伝も同じ）」：手写本では削除する。

『旧唐書』卷124「薛嵩伝」（『新唐書』卷111「薛仁貴伝」も同じ）に次のようにある。

薛嵩は絳州万泉（山西省万荣県）の人である。祖父は仁貴といい、高宗朝の名将であり、平陽郡公に封ぜられた。父は楚玉といい、范陽・平盧節度使となった。嵩は……体力があり、騎射に長じていたが、学問は無かった。安史の乱が起ると、部隊に入り、逆賊に仕えた。

張献誠と薛嵩は二人とも重臣の子孫であり、また、河朔地域の地元住民³⁸⁾ではない。けれども、彼らの父たちが共に幽州の官にあったことから、〔張献誠と薛嵩は〕若い時からそこに住みついて、次第に「胡化」し、ついに田承嗣の徒と区別がなくなった。風俗が人間に与える影響は甚だしいものである。これによると、当時の河朔の社会文化の状況もまた想像できる。

『旧唐書』卷124「令狐彰伝」（『新唐書』卷148「令狐彰伝」も同じ）に次のようにある。

令狐彰は京兆富平（陝西省富平県）の人である。父の凜は以前、范陽節度使の県尉を務めた時、幽州出身の女性と関係を持ち、彰が産まれた。凜は任期満了になると、彰を幽州の母のもとに留めた。そこで彰は范陽で育った。〔令狐彰は〕射術に長じていたので、仕官して軍に入り、安祿山に仕えた。

『旧唐書』卷124「田神功伝」（『新唐書』卷148「田神功伝」も同じ）に次のようにある。

田神功は冀州（河北省衡水市冀州区）の人である。その家系はもともと微賤の出であるが、天宝年間の末に県の里長となった。ちょうどその頃、河朔で兵乱が起き、幽・薊〔安祿山〕に仕えた。

『新唐書』卷148「康日知伝」に次のようにある。

康日知は靈州の人である。祖父の植は、開元年間に康待賓を捕縛し、六胡州〔の反乱〕を平定した。日知は若い時に〔成徳節度使の李宝臣の息子である〕李惟岳に仕え〔次々と職を〕かさねて、趙州刺史に抜擢された。

38) 「地元住民」：1947年版は「土著」、手写本は「原籍」とする。

康日知の姓と出身地から考えると、彼もまた中央アジアの「胡族」であることは間違いないだろう。

『新唐書』卷148「牛元翼伝」に次のようにある。

牛元翼は趙州（河北省趙県）の人である。……〔成徳節度使の〕王承宗〔は、当時、牛元翼の計略によって強大な勢力を有することになったので、牛元翼〕は、傅良弼と共に〔成徳軍の〕諸將軍の〔中で〕名がとどろいていた。……良弼は清河（河北省邢台市清河县）の人であり、弓を射るのが得意で軍中にその名がとどろいていた。

『旧唐書』卷145「李忠臣伝」（『新唐書』卷224下「叛臣伝」李忠臣伝同じ）に次のようにある。

李忠臣は旧姓が「董」、名を「秦」といい、平盧の人である。代々幽州の薊県に住んでいた。李忠臣は若い時に軍隊に入り、幽州節度使の薛楚玉、張守珪、安祿山らに仕えた。

『旧唐書』卷145「李希烈伝」（『新唐書』卷225中「逆臣伝」李希烈も同じ）に次のようにある。

李希烈は〔燕州〕遼西（北京市西城区もしくは北京市昌平区）の人である。……希烈は若い時に平盧軍に入り、後に李忠臣に従って海を渡って河南に至った。

以上引用した人々の氏族は³⁹⁾、確かに漢人もいれば、「胡種」の疑いがある者もいる。あるいは唐王朝の重臣の子孫がいれば、身分の低い階層出身者もいる。さらに中央政府に忠義を尽くしたのもいれば、背いた者もあり、また恭順と反逆を前後するなど互いに異なることもある。要するに、その家が代々、あるいは本人自身がかつて河朔に居留したことと、騎射に巧みであることの二点がほぼ類似している。これは実は河朔地域⁴⁰⁾が「胡化」していたことによってそうなのである。

「胡化」していた唐代の河北

『新唐書』卷148「史孝章伝」に、彼が父の史憲誠を諫めた言葉を次のように載せている。

39) 「以上引用した人々の氏族は」：1947年版は「綜上所引諸人氏族」、手写本は「綜上所引諸人其氏族」とする。

40) 1947年版は「河朔地域」とするが、手写本は「河朔地方」とする。

天下の人々は河朔を指さし夷狄のようだと言っています。

また『新唐書』巻210「藩鎮伝」の序文に次のようにある。

ついに河北の人たちに、みずからが羌や狄〔のような異民族〕と同様であるとおもわせるようになってしまった⁴¹⁾。……唐が亡ぶまでの百余年、おおむね王朝の領域とならなかった。

つまり五代の乱世を待たずして、中国の東北の一隅〔河北〕は田弘正の言う通り、「すべて荒廃した」（前文に引用した「田弘正伝」を参照⁴²⁾）のである。さらに不思議に思うのは、後漢から魏晉・北朝時代には〔漢〕文化が盛んだった河朔であるが、唐王朝⁴³⁾の最盛期、すなわち玄宗の御世には⁴⁴⁾、すでに「胡化」もまた始まっていたことである。この点、従来の歴史学者たちはほとんど説明しないので、ここに試みに一つの仮説を作り、将来、確証されるのを待つことにする。ただ、個人的にはまだ自信がない。

先に挙げた史料によると、中国の東北の一隅である河朔地域では、その住民で血統が漢人に属する者が、すでにそのように「胡化」していた。とすれば、この地域にはきっと「胡族」が移住していたことに疑いない。およそ東北と河朔地域に居住し「胡族」と関係のある人々といえは、高句麗・東突厥（『唐会要』『旧唐書』では北突厥という。おそらく古くはそう言ったのであろう）・回紇・奚・契丹といった人々であり、彼らが彼ら自身〔の居住する空間〕と隣り合う河朔地域に移住したことは、もちろん可能であり、そして事の道理からしてもまた筋道が立つ。ただ中国の東北一隅の河朔の地に、多数の中央アジアの「胡人」がいたことだけは、非常に理解しがたいことである。もし彼らが、西北のはるか遠い所から、短期間のうちに忽然と中国の東北端の海に面する地域に移住したとするならば、それはおそらく不可能なことである。

〔そこで〕ひとまず正史の中に記載される内容によって考えてみると、〔中央アジア出身の胡人が河北に移住した〕原因は三つ考えられる。もっとも古い原因は隋末の戦乱である。次に古い原因は東突厥の滅亡である。もっとも新しい原因、あるいは主たる原因ともいべきは、突

41) 「みずからが羌や狄〔のような異民族〕と同様であるとおもわせるようになってしまった」：1947年版の引用は「遂使其人由羌狄然」とするが、手写本は「遂使其人自視由羌狄然」とする。中華書局標点本も同じ。

42) 手写本では「(前文に引用した「田弘正伝」を参照)」の部分は削除されている。

43) 「唐王朝」：1947年版は「李唐」とし、手写本は「唐代」とする。

44) 「玄宗の御世には」：1947年版は「玄宗之世」、手写本は「玄宗之時」とする。

厥の復興である⁴⁵⁾。

河北が「胡化」した原因—その1

隋末の戦乱が原因であるというのは、『旧唐書』巻93「唐休璟伝」(『新唐書』巻111「唐休璟伝」もほぼ同じ)に次のようにあることによる。

〔永徽年間(650~656)に唐休璟は〕營州都督府の戸曹參軍をさずけられた。調露年間(679~680)、単于〔都護府のもと〕の突厥が反乱を起こし、奚・契丹を煽動して州県を略奪した⁴⁶⁾。その後奚と羯胡は桑乾〔都督府〕の突厥とともに反乱を起こした。〔營州〕都督の周道務は唐休璟を派遣し軍を率いて突厥を〔独護山で〕撃破したので、……豊州(内モンゴル自治区五原県)の〔次官である〕司馬に抜擢された。永淳年間(682~683)、〔突厥が豊州を包囲し、豊州都督が戦死すると〕朝議は豊州を放棄しようとしたが、……唐休璟は……上書してこう言った。「豊州は……秦漢以来、国家の郡県になっております。……隋末の争乱の際、〔豊州を〕固く守ることができず、そこで〔豊州の〕民衆を寧州(甘肅省慶陽市寧県)と慶州(甘肅省慶陽市)の二州へ移住させたため、戎羯が繰り返して侵入することとなり、そこで靈州と夏州を境界としました⁴⁷⁾。貞観の末年、あらたに人を募って豊州に住ませたの

45) 「上述の史料によると~突厥の復興である」の段落は1947年版と手写本では、異同が多い(下記参照)。特に、河北へエスニック集団が移動した原因を、1947年版は三つ挙げているのに対し、手写本は二つにしている点が大きなきちがいである。

〔1947年版〕

依據上列史料、知神州東北一隅河朔地域之内、其人民血統屬於漢種者、既若是之胡化、則其地必有胡族之遷移無疑、凡居東北與河朔有關之胡族如高麗東突厥(唐會要舊唐書俱謂之北突厥、蓋舊稱如此)迴紇奚契丹之類移居於與其部落隣近之地、如河朔區域、自有可能、而於事理亦易可通者也。獨中國東北隅河朔之地而有**多數之中亞胡人、甚為難解、若彼輩遠自西北萬里之外短期之内忽然遷移至東北端濱海之區、恐不可能、姑就舊史所載者考之、似有三因**：其遠因為隋季之喪亂、**其中因為東突厥之敗亡、其近因或主因為東突厥之復興。**

〔手写本〕

依據上引史料、神州東北一隅河朔地域之内、其居民屬於漢族血統者、既若是之胡化、則其地必有胡族之遷移無疑、凡居東北與河朔有關之胡族如高麗東突厥(唐會要舊唐書俱謂之北突厥)迴紇奚契丹之類移居於與其部落隣近之地、**即河朔區域、自有可能、而於事理亦易可通者也。**獨中國東北隅河朔之地而有**大部之中亞胡人、遠自西北萬里之外短期之内而遷移於東北極端濱海之區、似不易解釋。若就舊史所載者考之、似有二因**：其遠因為隋季之喪亂、**其近因為東突厥之復興。**

46) 「奚・契丹を煽動して州県を略奪した」：1947年版の引用は「誘扇奚契丹侵略州縣」とするが、手写本は「侵略」を「侵掠」に改める。中華書局標点本も「侵掠」に作る。

47) 1947年版は「以寧夏為邊界」とし、手写本は「邊界」を「近界」に改めるが、中華書局標点本により「乃

で、この西北一隅は安寧になりました。……」と。

中央アジアの「羯胡」〔の移動ルート〕は、かならず中国の西北地域を経て、しだいに中国の東北地域に至るものである。隋末の中国が混乱していた時期は、中央アジアの「胡人」がしだいに移動しはじめる最も良い機会であったと考えることができる。両唐書の「唐休璟伝」は、あるいはこの間の事情⁴⁸⁾をいささか伝えているものかもしれない。ただ『新唐書』「唐休璟伝」と『資治通鑑』巻202調露元年十月の条には、ともに「奚と羯胡が桑乾の突厥とともに反乱を起こした」⁴⁹⁾の文言は無い。また『新唐書』「唐休璟伝」は「戎羯が繰り返し侵略した」と記すが、『資治通鑑』巻203弘道元年五月条は「戎羯」を「胡虜」に改めている。確かに「戎羯」は通称であるが（『後漢書』巻48「呉蓋陳臧伝」論章懐太子注を参照）、しかしここでは粗略で誤りであること⁵⁰⁾を免れないだろう。そうならば調露年間の前後に⁵¹⁾、中国東北部にすでに少なからぬ「羯胡」⁵²⁾がおり、そして、その「羯胡」の移動はまさに隋の末年から西北に侵入し、〔その後〕転々として〔河北へ〕やって来たことになる⁵³⁾。これは事実において非常に合理的な解釈である⁵⁴⁾。

河北が「胡化」した原因—その2

いわゆる東突厥の滅亡について⁵⁵⁾、戈直本『貞観政要』巻9「安辺篇」におおよそ次のように記している。

突厥の頡利可汗が敗れた後、唐に降伏してきた突厥の諸部族長たちはみな、將軍や中郎將を授けられ、朝廷の中に列する突厥人で五品を超えるものは百人あまりとなり、朝廷の官

以靈夏為邊界」が正しい。

48) 「この間の事情」：1947年版は「此事」。手写本は「事」を削除する。

49) この箇所の1947年版の引用は「奚羯胡與桑乾突厥同反」とするが、正しくは「奚羯胡又與桑乾突厥同反」。上文の『旧唐書』「唐景休伝」は正しく引用している。

50) 「粗略で誤りであること」：1947年版は「疏誤」。手写本は「疏漏」とする。

51) 「調露年間の前後の期間に」：1947年版は「調露前後」、手写本は「調露弘道之間」とする。

52) 「少なからぬ羯胡」：1947年版は「不少羯胡」、手写本は「不少」を削除する。

53) 「転々としやって来た」：1947年版は「輾轉移來」、手写本は「輾轉而來」とする。

54) 「これは事実において非常に合理的な解釈である」：1947年版は「此於事實頗為合理者也」、手写本は「此於事實最為合理者也」とする。

55) 河北へのエスニック集団の移動の原因を、手写本では遠因と近因の二つにしたため、「いわゆる東突厥の滅亡は」から「そうならば東突厥の滅亡により、少数の柘羯の東方移動がきつとあったのである」まで、すべて削除。

僚の数に相当するほどとなった。ただ拓拔が帰順してこなかったのも、太宗がまた招慰させたところ、使者が次々とやって来た。涼州都督の李大亮は、このようにするのは無益で、むだに中国〔の力〕を消耗するだけだとし、次のように上奏した。……太宗はこの意見を受け入れなかった。

『通典』巻197「辺防典」突厥伝上に記載されている内容はこれと同じで、両者とも『太宗実録』にもとづいて書かれているのだろう。ただ『通典』には「太宗はこの意見を受け入れなかった」の文言は無い。これは〔『通典』の撰者である〕杜佑が省略したに違いない。また、〔『通典』では〕「拓拔」を「柘羯」に作るが、これはまだ後世の人が誤って改めたものではない。『旧唐書』巻62及び『新唐書』巻99「李大亮伝」はこの事を記すが、いずれもただ酋長の名前をあげるだけである⁵⁶⁾。一方、『資治通鑑』巻193「貞觀四年秋七月条」は、酋長の名前を記さず、「西突厥」という言葉でこれをまとめている⁵⁷⁾。思うに、「柘羯」のある種族はもともと西突厥の支配領域に居たのだろう。また、両唐書「李大亮伝」は、太宗が李大亮の願いに従ったと記すが、これは『貞觀政要』の記載と合わない。愚見では、『貞觀政要』のほうが本当のことを伝えているようであり、両唐書「李大亮伝」のほうは後世に脚色されたものであろう。それゆえ杜佑⁵⁸⁾は分からないものとして、そのままにしておいたのだろうか。そうならば東突厥の滅亡により、少数の「柘羯」の東方移動がきつとあったのである。

河北が「胡化」した原因—その3

いわゆる東突厥の復興〔が原因である〕というのは、先に引用した史料から総合的に考察するに、多くの「胡人」が河朔に移住し、あるいは中国に帰順した時期が、おおよそ武則天と唐の玄宗の開元の時にあたるからである。そしてこの三十年間⁵⁹⁾、中国東北地方の「胡族」の活動と最も関連する状況は、東突厥の復興、すなわち骨咄祿、默啜兄弟が武力で領土を開拓し、遠

56) 『旧唐書』巻62「李大亮伝」(2388頁)

時頡利可汗敗亡、北荒諸部相率内屬。有大度設・拓設・泥熟特勤及七姓種落等、尚散在伊吾、以大亮為西北道安撫大使以綏集之、多所降附。朝廷愍其部眾凍餒、遣於磧口貯糧、特加賑給。大亮以為於事無益、上疏曰……。太宗納其奏。

57) 『資治通鑑』巻193「貞觀四年七月」(6081頁)

西突厥種落散在伊吾、詔以涼州都督李大亮為西北道安撫大使、於磧口貯糧、來者賑給、使者招慰、相望於道。大亮上言……。

58) 「杜佑」：1947年版は「君卿」。杜佑の字である。

59) 「三十年間」：1947年版は「而三十年間」、手写本は「則三十年間」に改める。

く中央アジアまで勢力をひろげ、最終的に西突厥帝国の領土を彼らの統治下に置いたことである⁶⁰⁾。頡利が貞観の時(630)に滅亡してから、骨咄祿の時に復興するまでの東突厥の一部始終⁶¹⁾については、ここでは詳しく論述するものではない⁶²⁾。ただ両唐書に記載されている東突厥の復興と西突厥との関係の史料を少しばかり引用して、推論と証明に供することとする。

『旧唐書』巻194上「突厥伝」⁶³⁾(『新唐書』巻215上「突厥伝」も同じ)におおよそ次のようにある。

骨咄祿は、頡利の遠縁の者である。……みずから立ってカガンとなり、その弟の默啜を^{シャド}殺⁶⁴⁾にした。……骨咄祿は天授年間(690-691)に病死した。

……骨咄祿が死んだ時、その子はまだ幼かったので、默啜がついにカガンの位をうばい、みずから立ってカガンとなった。

〔聖暦二(699)年〕默啜はその弟の咄悉匐を立てて左廂^{シャド}察⁶⁵⁾とし、骨咄祿の子を……右廂察とし、それぞれ兵馬二万余人を統率させた。またその子の^{ほくく}匐俱を立て小可汗とし、……そこで^{しよぼくこん}処木昆ら十姓(『旧唐書』巻194下「西突厥伝」に次による。「その国を十集団(部落)に分け、その集団に一人づつ首領を置いて統率させた」⁶⁶⁾。これ〔十人の首領〕を^{シャド}十設⁶⁷⁾といった。それぞれの設に一本の箭を賜ったので、〔その十部を〕十箭と称した。また、この十箭を分けて左右の二つの廂とし〔一廂ごとに五つの箭〔五部落〕を置いた。左廂の五部落は咄陸⁶⁷⁾といい、⁶⁸⁾……右廂の五部落は弩失畢と号した。……咄陸の五部落はスイアープ以東におり、弩失畢の五部落はスイアープより西にいた⁶⁹⁾。これよりみな十姓部落と称した。……その咄陸〔の五つの部落〕には五人の^{チヨル}啜⁷⁰⁾がいた。そのうちの一人が処木昆

60) 「彼らの統治下に置いたことである」：1947年版は「置於其管制下事實也」、手写本は「置於其管制下事實是也」と「是」を補う。

61) 「一部始終」：1947年版は「始末」、手写本は「事」とする。

62) 「ここでは詳しく論述するものではない」：1947年版は「非此所能詳及」、手写本は「非此所能詳論」とする。

63) 「突厥伝」：1947年版、手写本ともに「北突厥伝」とする。中華書局標点本は「突厥伝」とする。

64) 手写本は「殺」を「設」に改めるが、中華書局標点本では「殺」に作る。

65) シャドは突厥の官称号。

66) 「その集団に一人づつ首領を置いて統率させた」：1947年版の引用は「每部仍令一人統之」とするが手写本は「仍」を削除する。中華書局標点本も同じ。

67) 「咄陸」：中華書局標点本は「咄六」に作る。

68) 「左廂の五部落は咄陸といい」：1947年版の引用は「其左廂號爲五咄陸」とし、手写本は「其左廂號五咄陸」とする。中華書局標点本は「其左廂號五咄陸部落」である。

69) 「弩失畢の五部落はスイアープより西にいた」：1947年版の引用は「五弩失畢部落居於碎葉已西」、手写本は「部落」を削除する。中華書局標点本は1947年版と同じである。

70) 「その咄陸〔の五つの部落〕には五人の啜がいた」：1947年版は「其咄陸有五啜」、手写本は「又云：其咄陸有五啜」とするが、中華書局標点本の該当箇所には「又云」の二字は見えない。

律啜である。⁷¹⁾ の兵馬四万余人を統率させ、また拓西可汗と称させた。

話はさかのぼるが、默啜は景雲年間（睿宗の元号。710～712年）に兵を率いて西進して〔チュルギッシュの首長の〕^{ミカフ} 娑葛を攻撃し、これを破って滅ぼした。契丹および奚は神功（697年）の年以來、常に默啜に徴発されていた。默啜の〔支配する〕地は東西一万余里、兵力は四十万にのぼり、〔東突厥最後のカガンであった〕頡利以降、もっとも強盛となっていた。〔默啜は〕自ら軍の強大さに恃み、支配下にある人々をしいたげていたが、その默啜もすっかり老いてしまうと、〔支配下にあった〕部落もしだいに支配から脱するものが増えていった。

（開元）四（716）年、默啜はまた、北へ遠征して九姓の拔曳固^{バイルグ}を討ち、トーラ河でこれと戦い、拔曳固は大敗した。默啜は勝利に酔いしれ気軽に帰還し、備えを設けていなかった。たまたま拔曳固の逃亡兵士の^{けつしつりやく}頡質略という者が柳の林の中より、突然、とび出してきて默啜を攻撃して斬った。

『旧唐書』巻194下「西突厥伝」阿史那射弥・附孫猷（『新唐書』巻215下「西突厥伝」もほぼ同じ）⁷²⁾ に次のようにある。

長安三（703）年⁷³⁾……〔阿史那猷は〕安撫招慰十姓大使に充てられた。猷のもとの支配領域はしだいに默啜と〔チュルギッシュの首領の〕^{うしつろく}烏質勒に侵略され、ついにあえて故地に戻ろうとしなかった。

『旧唐書』巻194下「阿史那步真伝」（『新唐書』巻215下「西突厥伝」もほぼ同じ）に次のようにある。

垂拱年間（685～688）より後、十姓〔西突厥〕の部落はしばしば突厥の默啜の侵攻と略奪をうけ、死んだり散り散りとなり、ほとんど滅びようとしていた。斛瑟羅につきしたがう者はわずかに六、七万人にすぎなくなるにおよび、唐の内地へ移り住み、西突厥の阿史那氏はここにおいてついに絶えることとなった（『資治通鑑』巻204にこのことを記す⁷⁴⁾が「默啜」の二字

71) 『旧唐書』「西突厥伝」の訳は、佐口透・山田信夫・護雅夫訳注『騎馬民族史2』（平凡社、1972）を参考にした。

72) 手写本は「（『新唐書』巻215下「西突厥伝」もほぼ同じ）」を削除する。

73) 「長安三（703）年」：1947年版は「長安元年」に作るが、中華書局標点本により修正。

74) 『資治通鑑』巻204則天后・天授元年十月条〔中華書局、6469頁〕

を削除している。思うに、〔司馬光が「默啜」の二字を記さなかったのは、默啜のカガン即位は垂拱より後、天授（690～691）の初めに骨咄禄が病死した後のことなので、〕上文の「垂拱」の二字があると整合しないからであろう⁷⁵⁾。ここに司馬光の読書の精密さが十分に証明されるのである。)

『旧唐書』巻194下「突厥伝下」突騎施烏質勒（『新唐書』巻215下「突厥伝下」突騎施烏質勒条も同じ）に次のようにある。

チュルギシュ うしつろく
突騎施の烏質勒は、西突厥の別種〔の首領〕である。……烏質勒が亡くなると、その長子の娑葛が代わってその集団を統轄した。……景龍三（709）年、娑葛の弟の遮弩^{しやど}は自分に分けられている部落が兄より少ないことを恨み、ついに叛乱をおこし突厥へおもむき、道案内となるから娑葛を討伐してほしいと願い出た。默啜はそこで遮弩をとめおき、軍二万人を派遣し、自身も側近たちとともに来て娑葛を討ち、これを捕らえて帰還した。

以上の史料をまとめてみると、つぎのようなことがわかる。復興した突厥〔第二〕帝国⁷⁶⁾の勢力は、実際に遠く中央アジアにまでおよんでおり、この時に中央アジアの「胡族」で〔中国の〕東北方面に向かって移動した者が必ずいたに違いない。『旧唐書』巻194上「突厥伝」に「默啜もすっかり老いてしまうと、〔支配下にあった〕部落もしだいに支配から脱するものが多くなっていった」とある。そうならば、中国の河北地域は、ただ突厥が復興して強大となった時に、突厥に侵略され蹂躪されただけでない。突厥が敗れて衰退した後⁷⁷⁾もまた、突厥の逃亡離散した様々な「胡部落〔遊牧諸集団〕」を〔河北地域は〕吸収したのである⁷⁸⁾。その結果、〔河北の〕民族はその影響を受け、〔河北の〕風俗⁷⁹⁾はこれのため変化してしまい、ついに往年の河北⁸⁰⁾とはまるで異なってしまい、そして〔様々な種族や文化が〕混淆し「胡化」した空間となったの

西突厥十姓、自垂拱以來為東突厥所侵掠、散亡略盡。濛池都護繼往絶可汗斛瑟羅收其餘衆六七萬人入居内地、拜右衛大將軍、改號竭忠事主可汗。

75) 「上文の「垂拱」の二字があると整合しないからであろう」：1947年版は「蓋與上文「垂拱」二字衝突之故」、手写本は「蓋與「垂拱」二字衝突之故也」とする。

76) 原文は「東突厥復興後之帝国」とするが、突厥第二帝国については「東」をつけないので、訳文においては「突厥」とした。

77) 「突厥が敗れて衰退した後」：1947年版は「即在其殘敗衰微之後」、手写本は「殘敗」を削除する。

78) 「もまた、突厥の逃亡離散した様々な「胡部落（遊牧諸集団）」を吸収したのである」：1947年版は「亦仍吸收其逃亡離散之諸胡部落」、手写本は「亦復吸收其逃亡之諸胡部落」とする。

79) 1947年版は「風俗」、手写本は「風化」。

80) 1947年版は「河朔」、手写本は「河北」。

である。そもそもこの〔河北という〕地域の民族が完全に漢文化から離れてしまい、そしてまた東北および西北の様々な「胡種」をその中に抱えこんでいたのだ。唐の中央政府がもし羈縻支配をおこなって、軍略と権謀術数を兼ね備えた人物を求めようとすれば⁸¹⁾、この複雑な「胡族」⁸²⁾が混在する〔河北という〕片隅の主将、すなわち「柘羯」と突厥の混血である安祿山⁸³⁾が、ちょうど当時の状況に最も適った唯一の人選であったといえる⁸⁴⁾。玄宗は東北方面の諸軍鎮を安祿山にまかせたのは⁸⁵⁾、他の理由があるといえども、安祿山の種族と河朔の情勢⁸⁶⁾が要するにその主たる原因であり⁸⁷⁾、ただ旧史に記載されるだけのよう、すべて李林甫が自分の〔宰相の〕地位を固めるための計画に出たのではないのだ⁸⁸⁾。

上篇の結論

以上、論じたことをまとめるとこうなるだろう。唐代三百年間の支配階級の変遷と交代とは、すなわち宇文泰の「関中本位政策」によって集められた集団の興亡と分化である。思うに、宇文泰は当時、関隴の「胡漢」民族の中から武力と才智のある者を融合して覇業をなした。そして隋唐はその遺産を継承してこれを拡充したのであり、その皇室と佐命の功臣はほとんど⁸⁹⁾西魏以来の関隴集団の人物⁹⁰⁾、いわゆる八大柱国家を代表とする者たちだった⁹¹⁾。唐朝の初期においては、この集団の力はいまだ衰えておらず⁹²⁾、皇室と有力な大臣や将軍たちはほとんど同じ系

81) 「唐代の中央政府が……求めようとすれば」：1947年版は「唐代中央政府若欲羈縻統治而求一武力與權術兼具之人材」、手写本は「若求一羈縻統治武力與策略兼具之人材」とする。

82) 「この複雑な「胡族」」：1947年版は「複雑胡族」、手写本はこの四文字を削除する。

83) 「柘羯と突厥の混血である安祿山」：1947年版は「柘羯與突厥合種之安祿山者」、手写本は「柘羯與突厥雜種之安祿山者」とする。

84) 「ちょうど当時の状況に最も適った唯一の人選であったといえる」：1947年版は「實爲適應當時環境之唯一上選也」、手写本は「爲適應當時環境之唯一」を削除する。

85) 「玄宗は東北方面の諸軍鎮を安祿山にまかせたのは」：1947年版は「玄宗以東北諸鎮付之祿山」、手写本は「玄宗舉東北諸鎮付之祿山」とする。

86) 1947年版は「河朔情勢」；手写本は「河朔環境」とする。

87) 「その主たる原因であり」：1947年版は「其主因」、手写本は「其主因之一」とする。

88) 1947年版は「豈得僅如旧史所載、一出於李林甫固位之私謀而已耶？」、手写本は「得」を削除する。

89) 「ほとんど」：19487年版は「大都」、手写本は「皆」とする。

90) 「関隴集団の人物」：1947年版は「関隴中人物」、手写本は「関隴之人物」とする。

91) 「いわゆる八大柱国家を代表とする者たちだった」：1947年版は「所謂八大柱國家即其代表也」、手写本は「所謂八大柱國家即此集團之代表也」とする。

92) 「いまだ衰えておらず」：1947年版は「未衰損」、手写本は「未衰微」とする。

統と階級の出身だった⁹³⁾。そのため李氏が帝位⁹⁴⁾につくと、その中心の軸をつかさどることとなり、その他の一族は中央政界に入れば宰相となり、地方へ出れば將軍となった。文武が分かれることなく、宰相・將軍たちと皇室もまた同類の人であり、その間には別の統治階級の存在を全く許さなかったのである⁹⁵⁾。[ところが] 武曩 [の時代] になると、武氏一族はもともと西魏以来の閹隴集團に属しておらず、よって唐室の勢力をほろぼそうとし、ついにこの伝統的集團を破壊する計画を実行しはじめた⁹⁶⁾。[科挙の] 進士科を尊んで前例のない人材登用をおこない、そして府兵制などを壊した⁹⁷⁾ のがそれである。この閹隴集團は西魏から武曩の時代まで⁹⁸⁾ すでに150年の長きにわたって存在していた。それ自身もとよりすでに次第におとろえ墮落していたが、武氏⁹⁹⁾ はさらにそれに一撃を加えたため、[閹隴集團は] ついにばらばらに崩れて没落し、その流れを阻止することはできなかった¹⁰⁰⁾。その後、皇位はふたたび李氏にもどり、玄宗に至って唐朝の最盛期を迎えるが¹⁰¹⁾、彼の祖母 [の武曩] が始めた閹隴集團の破壊工作はついに玄宗の時代に至って完成したのである¹⁰²⁾。閹隴集團がすっかり破壊されてしまうと¹⁰³⁾、皇室は始めて外朝の宰相や將軍、大臣¹⁰⁴⁾、すなわち士大夫および將軍たちと異なった階級に属することと

93) 「皇室と有力な大臣や將軍たちはほとんど同じ系統および階級の出身だった」：1947年版は「皇室與其將相大臣幾全出於同一之系統階級」、手写本は「皇室與其將相俱全出同一之系統階級」とする。

94) 「帝位」：手写本は「帝王之位」とする。

95) 「文武が分かれることなく、宰相・將軍たちと皇室もまた同類の人であり、その間にはますます別の統治階級の存在を許さないのである」：1947年版は「自無文武分途之事、而將相大臣與皇室亦爲同類之人、其間更不容別一統治階級之存在也」、手写本は「皇室與將相大臣本同屬一階級、而將與相亦爲同類之人、自無文武分途之事也」と書き換える。

96) 「武曩に至り、その氏族はもともと西魏以来の閹隴集團に属しておらず、よって唐室の勢力を消滅させようとし、ついにこの伝統的集團を破壊する計画を行いはじめた」：1947年版は「至於武曩、其氏族本不在西魏以来閹隴集團之内、因欲消滅唐室之勢力、遂開始施行破壞此傳統集團之工作」、手写本は「至武曩、則其氏族本不在西魏北周以来閹隴集團之内、既欲消滅唐室之勢力、因而開始施行破壞此傳統集團之工作」とする。

97) 「破壊した」：1947年版は「毀」、手写本は「弛」とする。

98) 「この閹隴集團は西魏から武曩の時代まで」：1947年版は「此閹隴集團自西魏迄武曩」、手写本は「此閹隴集團自西魏以迄武曩」とする。

99) 「武氏」：手写本は「武曩」とする。

100) 「ついにばらばらに崩して没落させそれを止めることはできなかった」：1947年版は「遂致分崩墮落不可救止」、手写本は「遂致分崩墮落而不可救」とする。

101) 「玄宗に至って唐朝の最盛期を迎えるが」：1947年版は「至玄宗尤稱李唐盛世」、手写本は「至於玄宗尤稱李唐之盛世」とする。

102) 「ついに彼自身の御代に至って完成したのである」：1947年版は「竟及其身而告完成矣」、手写本は「至其身竟告完成矣」とする。

103) 「破壊された後」：1947年版は「破壞後」、手写本は「破壞之後」とする。

104) 「外朝の宰相・將軍大臣」：1947年版は「外朝之將相大臣」、手写本は「外朝之大臣」とする。

なった¹⁰⁵⁾。同時に宦官もまたこれによって統治階級に変化し、皇室を取り囲んで隠し、そして外朝の文武官と互いに対抗するようになった¹⁰⁶⁾。もし、皇室と外廷の文武官僚たちがおなじ階級に属していれば、両者の間にはもとより宦官階級が〔入りこんで〕国政に関与する余地など無かったのだ¹⁰⁷⁾。しかしさらに注意すべきなのは¹⁰⁸⁾、閹隴集団は、もとは「胡漢」の文人武人を一つにしたもので、故に文武官ははっきりと分かれず、將軍と宰相は兼任すべきものであった。しかし、今すでに別に科挙で採用された士大夫階級が誕生した以上、宰相は翰林学士の中から選ばれるようになり、辺境の軍事長官¹⁰⁹⁾の職は蕃將でなければ、その任にたえることができなくなった。そして宰相と將軍、文官と武官、漢人と「胡人」の任用の道は、ついに分かれて再び一つになることは無かったのである¹¹⁰⁾。およそ科挙の進士科の尊重、府兵の廃止、宦官の朝廷における専権、蕃將すなわち「胡化」した武人が地方で割拠するといった事例は¹¹¹⁾、すべてともに玄宗の治世に生まれたのである。すなわち宇文泰の創建した閹隴集団の完全崩壊と、唐代の統治階級の変化交代は玄宗時代におけるシンボリックな出来事である。これをもって唐代史を論じる者はかならず玄宗朝¹¹²⁾をもって時代区分の境界とする。このことは中国史を研究する者は、大体知っていることだけれども¹¹³⁾、そうである理由については、学問を好み、深く思索し古今のことに通暁している人でなければ、詳しくはっきりと言うことはできないのである¹¹⁴⁾。

(上篇 完)

105)「士大夫および將軍たちと異なった階級に属することとなった」：1947年版は「士大夫及將軍屬於不同之階級」、手写本は「士大夫爲不同之階級」とする。

106)「そして外朝の文武官と互いに対抗するようになるのだ」：1947年版は「而與外朝之將相大臣相對抗」、手写本は「而與外朝對立」とする。

107)「もし……関与する余地など無いのだ」：1947年版は「假使皇室與外廷將相大臣同屬於一階級、則其間固無關階級統治國政之餘地也」、手写本は「蓋皇室與外廷將相若同屬於一階級而不分化、則其間將固無關階級統治國政之餘地也」とする。

108)「しかしさらに注意すべきなのは」：1947年版は「抑更可注意者」、手写本は「又」とする。

109)「辺境の軍事長官」：1947年版は「邊鎮大帥」、手写本は「邊鎮將帥」とする。

110)「ついに分かれて再び一つになることは無かったのである」：1947年版は「遂分岐不可復合」、手写本は「遂亦分岐不可復合」とする。

111)「およそ科挙の進士科の尊重、府兵の廃止、……蕃將すなわち胡化した武人が地方で割拠するといった事例は」：1947年版は「舉凡進士科舉之崇重、府兵之廢除、……蕃將即胡化武人之割據方隅」、手写本は「舉凡進士科舉之注重、府兵之廢棄、……蕃將之割據邊疆」とする。

112)「玄宗朝」：1947年版は「玄宗之朝」、手写本は「玄宗一朝」とする。

113)「このことは中国史を研究する者は、大体知っていることだけれども」：1947年版は「其事雖爲治國史者所得略知」、手写本は「其事雖爲治國史者所能略知」とする。

114)「好學深思通識古今之君子にあらざれば、詳しく切言する能わざるなり。」：1947年版は「則非好學深思通識古今之君子、不能詳切言之也」、手写本は「則非好學深思者、不能詳確言之也」とする。

